

佳作

初めての夜の留守番

千葉県
浦安市立日の出小学校 四年

住井 天音

「二人で留守番、お願いね。」

そう言い残して、母は出かけていった。昨春秋、父が仕事でない時、母はマンシヨンの自治会役員の集まりに、出席しなくてはいけなくなつた。

今までだって、短い時間なら妹と留守番したことがある。でも、二人だけで夜に家ですごすのは初めてのことだ。しかも、二つの約束をした。お風呂をすませること、夜九時にはねむること。

「円香も年中になつたんだから、お姉ちゃんとがんばるのはいい経験よ。」

母は、出かける前にのん気なことを言っていたけど、私は心配でたまらなかつた。

円香は、二月生まれで、クラスでもおチビさん。本人はいつも一生けん命なのに、友達よりもまく出来ないことが多くて、しょっちゅう、落ちこんでいるのだ。今夜も、すねないといんだけどなあ……。

まず、テレビを見て、ごきげんの妹を、お風呂にさそつた。まだ一人では上手に出来ないで、円香の頭をシャンプーであらつてあげた。すると、

「気持ちいい。いつもよりさっぱりした。」
とびきりの笑顔を見せてくれた。私も、なんだかうれしくなつた。いい調子だ。

かみをかわかしてあげて、今度は、一しよにおふとんに入った。いつも、母がしてあげるように、妹のとなりで横になつた。円香は、安心したように、私にくつついて、うとうと

し始めている。私も妹が温かくて、きもちよく、ねむり始めた。その時だ。とつぜん、

「ママー。トイレ行きたいよおー。」

と、たたき起こされた。私は、「お母さんと、かんちがいしたんだ。」と思うと、かわいくてたまらなかつた。いつもなら、面どうくさいのに、「わかつたよ。」と自然に世話を始めていた。

次の朝、母は、

「二人で留守番ありがとう。二人だけで、よくちゃんとねむれたね。お姉ちゃん、円香ちゃん、えらかつたね。」とほめてくれた。すると、妹がすぐに、

「お姉ちゃんが、やさしくしてくれたからだよ。お姉ちゃん、ありがとう。」

と言つてくれた。私はその時、今まで聞いた中で、一番うれしい「ありがとう」の言葉のように思えて、むねが温かくなつた。

あの留守番の後も、私と妹は時々つまらない言いあらそいをするところがある。でも私は、初めて二人きりの夜をすごして、これからはけんかをして、何があつても妹を守つていける、そんな自信がついたように思えた。私も、少しは、いいお姉さんになれたかな。

だから円香へ、私も言いたい。
「こちらこそありがとう。これからもお姉ちゃんと仲よくしてね。」